

1月1日 神の母聖マリア

民 6:22～27 ガラ 4:4～7 ルカ 2:16～21

1. ルカ

v.20 「羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。」

クリスマスの物語りにおいて、羊飼いたちは脇役であります。彼らは舞台の中心に立つことなく、いわば“その他大勢”の役割を果たして帰って行きます。なぜならこの物語りの主題は「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである」(2:11) という、御子の受肉の出来事だからです。

そしてその受肉された御子は、八日たって割礼を受け、イエスと名付けられました。それは最早飼葉桶の中の乳飲み子ではなくて、私たちを罪の世から救うために遣わされた神の小羊としてのイエスであります。

神の母聖マリアは、これらの救済史の出来事を心に納めて思い巡らす女として描かれています。彼女は使徒たちと共に、主イエスの受肉と受難と復活の証言者として、私たちの中に立っているのです。復活して父なる神の右の座にお着きになった天上のキリストが、ミサをささげる地上の教会の祭壇で私たちに出会ってくださるとき、そこには使徒たちおよび神の母聖マリアも共に証言者として私たちの中に立っているのだということを信じましょう。古くから西方教会で聖堂の内外を飾って来た聖人の像やマリア像(および母子像)は、東方教会のイコンと呼ばれる絵画と共に、このような教会共同体のあるべき姿を表現するものと理解されて来ました。

2. ガラ

v.4 「しかし、時が満ちると、神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました。」

御子の誕生の出来事は、神の救済史の時が満ちて起こりました。それは歴史の上の現実であって、それに続く教会の時へと進み、やがて完成する約束の神の国への待望の出発点であります。

主イエスのガリラヤにおける宣教は、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(マコ 1:15) という呼びかけで始められました。主の復活の後に誕生した教会への使徒の呼びかけは、「今や、恵みの時、今こそ、救いの日」(II コリ 6:2) でありました。使徒パウロはローマの教会に宛てて書いた手紙の中で、次のように述べています。「更に、あなたがたは今がどんな時であるかを知っています。あなたがたが眠りから覚めるべき時が既に来ています。今や、わたしたちが信仰に入ったころよりも、救いは近づいているからです。」(ロマ 13:11)

私たちの救い主イエスは、一人の女マリアを通して「肉となって来られ」(ヨハ4:2)ました。それは肉の人である私たちを罪の支配から贖い出して、神の子としてくださるためでした。今や洗礼の秘蹟によって救われたキリスト者は、罪の奴隷ではなくて、神の国の相続人でありますから、神の国の王であるキリストが再臨されるのを、頭を上げて待ち望んでいます。そのような会衆の中に、使徒たちおよび聖マリアも共にいる……、それが私たちの教会共同体です。

3. 民

アロンの子孫である祭司が主の名によって民を祝福するとき、神の救済史はその民と共にありました。主の民を祝福することは祭司に委ねられたとうい務めであると、旧約聖書では理解されています。

そのようにキリスト教会も、イエス・キリストにおける救いの恵み、神の愛、聖霊の交わりを会衆一同のために願う祝福の祈りを、司教および司祭に委ねられたとうい務めと考えています。それは神の救済史の完成を待望する民への祝福の祈りであり、従って同時に救済史の主体である父子聖霊なる神にささげる祈りでもあります。

聖マリアも、使徒たちおよび私たち会衆一同と共に神の国の完成を待望しつつ、この救済史の中に共にいることを思いましょう。それが私たちの教会共同体なのです。

ハレルヤ、アーメン。

1月4日 主の公現

イザ 60:1～6 エフェ 3:2～6 マタ 2:1～12

1. マタ

神の母聖マリアの祭日の次に来る日曜日は、主の公現の祭日であります。西方教会では4世紀頃からこの祭日が祝われるようになり、そのミサでは代々の教会は一貫して現在と同じイザヤとマタイのテキストを朗読して来ました。それによって教会は、今の時代がキリストの時(anno Domini)であることを宣言し続けて来たのです。ですからそれは歴史の現実であって、降誕祭に関わる数々のドラマは決しておとぎ話として解消されてしまってはならないことを、私たちは強く思いましょう。

東方の学者たちが誕生して間もない幼子イエスを拝み、贈り物を献げたという伝説がミサで朗読される時、教会はそれを終末的な天上の礼拝(黙4章以下)、天のエルサレム(黙21章)の予兆として理解して来ました。

御子は肉によればダビデの子孫から生まれ(ロマ1:3)たということを、vv.5-6は証言しています。天上の勝利者イエス(黙5:5、イザ11:1以下)が私たちの歴史の中へと受肉されたことを、教会は公現の祭日という形で記念することによって、今の時代がキリストの時であることを宣言し続けて来たのです。星の出現も、ヘロデの嬰兒虐殺も、御子の受肉の出来事に前後して起こった歴史の中の事件でありました。

2. イザ

東方の学者たちの来訪を、このイザヤの預言の実現の開始のしるしとして理解する大きな喜びを、4世紀の教会は主の公現の祭日という形で典礼暦の中に組み入れました。その喜びは、正にキリストの福音の喜びそのものであって、今や来るべき神の国で完成するものだからです。ですから典礼憲章は次のように教えています。「地上の典礼において、われわれは天上の典礼を前もって味わい、これに参加している。」(8) 私たちキリスト者は霊の初穂をいただいて(ロマ8:23)神の国の相続人となった民でありますから、その日には必ずイザヤの預言の通りの天上の典礼に与ることでしょう。

vv.2-3 「あなたの上には主が輝き出で、主の栄光があなたの上に現れる。国々はあなたを照らす光に向かい、王たちは射出するその輝きに向かって歩む。」

3. エフェ

現代のキリスト者は、聖書を読んでそこから正しく(素直に)福音を理解するということが、非常に困難な時代の中に生きているように思えます。いろいろな弁解や説明が語られて来ました。しかしそれらによって状況が改善されることは殆どない、いわば時代の流れの強い力が20世紀のキリスト教世界を支配して来たと言うことが出来ます。そしてそれに対して、だれも良い処方箋を出してはくれませんでした。

2004年1月(主日C年)

そのような過去の事実を十分に認めながら、それでもなお神のことは聖伝と聖書を通して語られ続けていることを指し示すこと、それがこの「聖書の学び」の使命であります。使徒たちによって宣教された「秘められた計画」(v.3)は、聖書の中に非常に分かりやすく書かれているのです。使徒パウロは言っています。「あなたがたは、それを読めば、キリストによって実現されるこの計画を、わたしがどのように理解しているかが分かると思います。」(v.4) それは復活のキリストから使徒たちに啓示されたものでありますから(v.5)、私たちは聖書を通して使徒たちの宣教に聞く必要があります。

聖書を学ぶことは、人間の好みや注文に合わせて聖書を料理することではなくて、その中で語られている使徒たちの宣教に、ただそれだけに、素直に耳を傾けることなのです。

その「秘められた計画」とは、「すなわち、異邦人が福音によってキリスト・イエスにおいて、約束されたものをわたしたち(ユダヤ人)と一緒に受け継ぐ者、同じ体に属する者、同じ約束にあずかる者となるということです。」(v.6) この約束の預言者的な宣言が今朝のイザヤ書のテキストであり、東方の学者たちの来訪はこの約束の実現の開始を告げるしるしなのです。

今年の主の公現の祭日に、聖書を通して語られる神のことは聞く恵みを与えられる人々は幸いです。

ハレルヤ、アーメン。

1月11日 主の洗礼

イザ 40:1～11 テト 2:11-14, 3:4-7 ルカ 3:15～22

1. ルカ

洗礼者ヨハネから洗礼を受けて、主イエス・キリストの公生涯が始まりました。伝説のイエスではなくて、「わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられた」(ロマ 4:25) 歴史上のイエスが、ここにはおられます。降誕節は全世界が救い主を迎えたことを記念するときであると、教会は理解して来ました。主の洗礼の祝日は、私たち信じる者に聖霊と火で洗礼をお授けになる方の出現を宣言するものです。

vv.21-22 「民衆が皆洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて祈っておられると、天が開け、聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た。すると、“あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者” という声が、天から聞こえた。」

天からの声は、詩 2:7 と イザ 42:1 を想起させるものであります。

この祝日は3世紀に東方教会で始まりましたが、西方教会では永く忘れられていたものを、第二バチカン公会議が典礼暦の中に再び取り入れたものです。それで、この主の洗礼の祝日まで私たちの降誕節は続いて、その翌日から年間に入ることになりました。

2. イザ

第二イザヤは、神の救済の時の迫り来る良い知らせを、バビロンで捕囚となっているイスラエルの民に向かって預言しました。苦役ではなくて慰めを、裁きではなくて民の回復をもたらすために来られる神を指し示して、同胞に覚醒を呼びかけました。

vv.9-10 「見よ、あなたたちの神、見よ、主なる神。彼は力を帯びて来られ、御腕をもって統治される。」

紀元前 538 年の、キュロス王によるバビロン征服と捕囚民へのエルサレム帰還許可に先立つ数年間、この第二イザヤの初期の預言の背景でありました。

キリスト教会が主の洗礼の祝日を降誕祭の後祭りとして祝うようになった理由は、おそらく主の受肉から始まった「恵みの時、救いの日」(II コリ 5:2) の中に、現在の教会が歩んでいることを宣言するためでありました。第二イザヤは迫り来る救済の時に預言しましたが、私たち教会は現在、キリストの「恵みの時、救いの日」の中にいます。

3. テト

v.14 「キリストがわたしたちのために御自身を献げられたのは、わたしたちをあらゆる不法から贖い出し、良い行いに熱心な民を御自分のものとして清めるためだったのです。」

2004年1月(主日C年)

良い行いに熱心な民とは、「イエス・キリストの栄光の現れを待ち望む」(v.13) 民のことです。私たちの本国は天(神の国)にあります(フィリ3:20)。キリストは私たちを「天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しぼまない財産を受け継ぐ者としてくださいました。」(Iペト 1:4)

イエス・キリストを信じて洗礼を受ける「恵みの時、救いの日」が、今なお現代の教会に与えられています。「この救いは、聖霊によって新しく生まれさせ、新たに造りかえる洗いを通して実現したのです。」(v.5) 洗礼の秘蹟は、私たちの地上の旅路だけではなく、神の国への復活と永遠の命に関わる救いを与えるのです。

私たちがミサをささげるとき、祭壇でお会いする主は、私たちに聖霊と火による洗礼を授けてくださったイエスであり、教会はこの方が栄光のうちに再び来られるのを、待望しているのです。

ハレルヤ、アーメン。

1月18日 年間第2主日

イザ 62:1~5 Iコリ 12:4~11 ヨハ 2:1~11

降誕節のあと四旬節に入るまでの短い期間、典礼暦は年間となって、今年は六回の主日がこれに当たります。その冒頭の主日(第2主日)の福音書の日課として、本年(C年)はヨハネ2章のカナでの婚礼のテキストが割り当てられています。それは全キリスト者、いや全世界への「しるし」としての物語りであります。決して単なる一つの逸話としてではなくて、教会の使徒的宣教が現代のキリスト者である私たちに有効に伝えられるために、ここに割り当てられているのです。

1. ヨハ

既にヨハネ以前の福音書においても、婚礼あるいは婚宴は神の国を譬える比喻として用いられていました(マタ 22:1-14, 25:1-13)。ぶどう酒は祝いに喜びを加えるものであって、喜びは神の国の福音の本質的な要素であります。イエス・キリストはこの神の国の喜びを実現する救い主であることを、ヨハネ福音書は「しるし」という言葉で私たちに証言しています。

v.11 「イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。」

福音書が語るイエスは、教会の信仰の対象であるキリストなのだという聖書の証言を、現代のキリスト者はしっかりと聞き取らなければなりません。

ヨハネ福音書のこのテキストの背景には、当時のギリシアの酒神ディオニソスの祭りで、水がぶどう酒に変化する奇跡の儀式が行われていたという話が存在します。またこのテキストにおいて水を入れたかめはユダヤ教での清めに用いるためのものでありました。

イエス・キリストの福音という「喜びのぶどう酒」は、それらに取って代わる真に「良いぶどう酒」であり、教会が宣教している新しいぶどう酒(キリストの福音)は、信じるすべての人に永遠の命を得させる神の力(ロマ 1:16)であるという明確な語りかけを、私たち一同は今朝聞かされているのです。

2. イザ

紀元前 538 年のキュロス王による捕囚民への帰還許可とエルサレム神殿再建の布告から 20 年余の挫折の期間を経て、ダレイオス一世の治下になって再び神殿の再建が始まりました(エズ 6 章)。イザヤ書のこのテキストは、この新しい時代に現れるであろうヤーウェの栄光とエルサレム再建への、燃えるような情熱と期待を高らかに歌っています。

イエス・キリストこそは、この期待と喜びを完成する終末の救い主であることを、教会は信じているのです。地上の神殿ではなくて天上の神殿を、地上のエルサレムではなくて天のエルサレムを実現するイエス・

キリストに、私たち教会は信仰をささげています。キリスト者の喜び、信仰の喜びの源泉は、天の婚宴に譬えられている神の国(黙 21:2)の到来にあるからです。

「“神の国のために”、わたしは決して口を閉ざさず、“天のエルサレムのために”、わたしは決して黙さない。」

21世紀の教会を担う私たち現代のキリスト者に、イエス・キリストへのこの信仰の情熱と終末的期待が目覚めることを、神は求めておられます。

3.1 コリ

賜物という言葉は一般に、人の能力や知識、経験、財産、地位等のことと理解されています。多くの人々の貢献と援助によって、教会も、その諸活動も支えられているというのが、通常の見え方です。

しかし聖書は「霊的な賜物」(v.1)のことを特別に取り上げているのです。

v.7 「一人一人に“霊”の働きが現れるのは、全体の益となるためです。」

もし現代のキリスト教会が使徒たちの教会と同一のものであり、現代の教会が宣べ伝えている福音が使徒たちの語った福音と同じものであるということが事実であるとすれば、…… 更に私たちが信じ告白している救い主イエス・キリストが使徒たちを宣教に遣わされたイエス・キリストと同じ方であるとすれば、それは「霊的な賜物」「霊の働き」が歴史の教会を通して常に存在していたからに他なりません。

天の神殿、天のエルサレムを実現されるキリストへの信仰、キリストの福音の喜びが、21世紀の教会に豊かに満ちるために、「霊的な賜物」「霊の働き」を熱心に祈り求めましょう。私たちキリスト者は「神の子」「救い主」であるイエスを信じているのです。

アーメン、ハレルヤ。

1月25日 年間第3主日

ネへ 8:2～10 1コリ 12:12～30 ルカ 4:14～21

1. ルカ

v.20-21 「イエスは巻物を巻き、係の者に返して席に座られた。会堂にいるすべての人の目がイエスに注がれていた。そこでイエスは“この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した”と話し始められた。」

私たちキリスト者にとって、聖書を学ぶことは神のことは(キリストの福音)を聞くことであります。ミサにおける“ことばの典礼”は、聖書を勉強して一般的教養を身につけるためではなくて、「信者に神のことはの食卓の富を豊かに与えるために」(典礼憲章 51) 用いられなければなりません。なぜならそこでは、終末の日に至るまでの歴史を通して日毎に実現して行く神のことは(福音)が朗読され、説教されるからです。

もちろん人々が聖書を学ぶこともキリストの福音を聞くこともしない間にも、神の救済史は終末の完成の日に向かって確かに進行しているに違いありません。しかし主日のミサに集う会衆にとっては、“ことばの典礼”を通して神のことはを聞かされるとき、神の救済史の一ステップが、自分の救いに関わる恵みとして実現するのです。イザ 61:1-2 の言葉が、共にミサをささげる私たちにとって、今日の出来事として新しく実現しています。そしてそこから、天上のキリストは説教者の口を通して、神の国の福音を話し始められます。

2. ネへ

紀元前 400 年頃のエズラの帰還によって、律法の宗教であるユダヤ教団の歴史が始まったと言われています。ペルシアの王アルタクセルクセス II の勅令によって、祭司であり書記官であるエズラはモーセの律法の書を携えてバビロンからエルサレムに到着しました。そして第 7 の月の 1 日から七日間にわたって、毎日これを朗読して民に聞かせたと伝えられています。

ネへ 8 章は、本来はエズ 8 章と 9 章の間に位置する記録で、そのような順序で読むと話の筋道がはっきりします。「民は皆、律法の言葉を聞いて泣いていた」(v.9) という言及および前後関係からは、申命記が連想されるのですが、しかし民が律法に耳を傾けるこの祭りは、大きな喜びの祝いでありました。それは再建のイスラエルとしてのユダヤ教団成立という、重要な出来事の実現の記録であります。このようにしてイスラエルは、神の子イエス・キリストの誕生に至る救済史に関わる民として、再出発しました。

神の御業は書物としての聖書に拘束されるものではありませんが、しかも神は聖書の証言を用い、それに立証されて救済史を展開して行かれます。使徒パウロは次のように教えています。

「ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる義です。」(ロマ 3:21-22)

3. Iコリ

聖書を学ぶことは、人々に多くの賜物を与えます。しかし賜物にはいろいろありますが、神の救済史の実現に人々を与らせ、キリストの体である教会を造り上げるという一つの目的へと、すべてが方向づけられています。

聖書は神の救済史から切り離して読まれるべきではなく、またそこからキリスト者である私たちへの神のことばとは別な何かを求めて、学ぶべきでもありません。教会の外の世界の聖書研究は、たとえ学問的にはどんなに立派なものであっても、救済史を実現して行く神のことばを、ミサに集う会衆に伝えるという役割を果たしはしないからです。

確かに20世紀のキリスト教会は、カトリック以外の諸教派も含めて、説教の貧困のどん底を低迷して来たと言って過言ではないでしょう。21世紀の教会にとって、そこからの脱却は困難を極めた課題であるように見えます。それでも・・・、それでも・・・、キリストの体である教会およびそのミサから切り離しては、聖書から神のことばを聞くことが出来る場所は決して存在しないことを、十分に理解しなければなりません。

“ことばの典礼”は、私たちのミサの中で、“感謝の典礼”と共に、そのいずれもが欠けてはならない(長円の)二つの中心のようなものなのですから。

v.27 「あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。」

「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉(福音)を聞くことによって始まるのです。」(ロマ 10:17) アーメン、ハレルヤ。